

転写資料記述のための 概念モデルの特徴と課題

Features and Issues of a Conceptual Model
for Description of Copied Materials

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

UDA Norihiko, YAMADA Taizo, MURATA Ryoji and YAMAMOTO Yasunori

- ①はじめに
- ②本モデルの特徴
- ③転写資料の記述例
- ④考察と課題
- ⑤おわりに

[論文要旨]

本稿は共同研究プロジェクトにおいて国立歴史民俗博物館以外の研究者が所属する機関が所蔵している資料を「転写資料記述のための概念モデル（以下、本モデル）」で記述してみることで、本モデルの適用可能性を検証するとともに、本モデルの特徴と課題について考察したものである。記述対象は東京大学史料編纂所の『烏津家文書』の転写資料、東京国立博物館の《松林図屏風》の転写資料、国立民族学博物館の「ウズベク民族の帽子」の転写資料およびビデオテープ番組である。

本モデルがこれまでの情報記述の枠組みと大きく異なる点は「転写する過程」を強く意識した点と「アナログとデジタルの区分なく管理する」点である。情報資源の記述というと、対象をいかに詳細に記述するのかということを目的にした研究が多いが、本研究は詳細化には立ち入らず、あくまで展示等の準備段階で生じた多様な転写資料を管理することを目的としている。また、これまでアナログはアナログ、デジタルはデジタルというように分離して扱うことが多いのに対して、本モデルではアナログとデジタルを区別しない。これは今までありそうでなかったフレームワークであり、全体として博物館の資料管理という実務的なところに焦点を当てている点が最大の特徴である。

実際に概念モデルにしたがって記述してみたところ、どの資料も問題なく記述できており、本モデルの適用可能性はかなり高いことが示された。しかしながら、いくつか課題も見えてきた。一つ目は運用の問題である。本モデルを構築した動機は転写資料を実際に管理することであるが、メタデータを記述するだけでは、転写資料間のつながりを把握することは難しく、別途転写管理システムが必要になるだろう。二つ目の課題はメタデータ記述についてで、特にエレメントの拡張を認めるかどうかについては検討が必要である。三つ目はモデルとしての限界、すなわち転写の複雑性にどこまで対応可能かどうかという点である。

【キーワード】 転写資料、資料管理、情報記述、概念モデル、メタデータ